

# 青森米 複数ブランド展開を



いしつか・さとし 1973年、川崎市生まれ。東京農業大農学研究科博士後期課程修了。2018年から現職。主な著書に「大震災・原事故のインパクトと復興への道」などがある。

日本穀物検定協会が2月末に発表した2023年産米の食味ランキングで、青森県のブランド米「青天の霹靂」が15年のデビュー以来、初めて最高評価の「特A」を逃した。一方で、本年度に全国デビューを果たした県産米の新品種「はれわたり」が特Aを獲得。明暗が分かれた評価は、今後のブランド戦略にどのような影響をもたらすのか。弘前大農学生命科学部の石塚哉史教授（農業経済学）に聞いた。

（伊藤卓哉）

## 特A

### 「青天の霹靂」陥落 「はれわたり」獲得

―霹靂が特Aから陥落した影響は。

「特A評価は価格を決める一つの目安になる。流通量が少ないため、販売先も確保できているとなれば、すぐに価格が下がる心配はない。ただ、今後の販路拡大には影響が出るだろう」

「霹靂は県産の他品種をけん引する『傘ブランド』としての役割がある。霹靂

#### 弘前大農学生命科学部 石塚哉史教授に聞く

の評価が下がることによつて、はれわたり、（主に業務用の県産米）まっしぐらの2品種も一緒に価格が下落するような状況は避けなければいけない」

―特Aを獲得する意義は。

「ブランド米は群雄割拠の時代で、すぐに新品种が出てくる。ランキングで一喜一憂する必要はないが、

1、2年で特Aに復帰しないと、消費者の目に留まらないコメになってしまう」

「過去に魚沼産コシヒカリも特Aを逃したことがあるが、大きな影響は受けなかった。消費者との強い信頼関係を築けば、評価に縛られない。そこで初めて本当にブランド力のあるコメと言える。霹靂がどれだけのファンをつくってきたかが問われる時だ」

―はれわたりの特Aは県産米にとって明るい材料だ。

「はれわたりが最高評価を獲得できたことで、青森はおいしいコメを作れる土壌があると示せた。新たな銘柄米を生み出したことによつて、リスク分散を図れたのは成功だったとも言える」

「東北でも秋田、山形は特Aを複数獲得している。青森も多ければ霹靂、はれわたり、まっしぐらの3品種で特Aを取れる可能性がある」という点は強みがある。継続して複数獲得が実現できるならば、青森県のコメ産地としての地位向上にもつながるものと考えられる」

この画像は、当該ページに限って“河北新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。